

「恨」と統一教

古田 富建

1. 「恨」について

現代の一般の韓国人にとって、「恨」とは民族性、美意識、伝統的かつ固有の情緒などとして認識されているものである。日本でも韓国文化論で必ずと言っていいほど紹介される用語である。韓国人の中で認識されている「恨」の定義は多義に渡っているが、その中核になる要素の一つは「悲哀」の情緒であり、日本や中国の「怨」と区別されて語られることが多い。

「恨」の学術的な考察は、戦後間もなく文学の世界で始まる。現在でもその中心は文学界だが、哲学、心理学、神学、社会学など学際的な広がりを見せている。しかしそれらの定義には「自虐的」と「他者攻撃的」、「第三世界に共通する情緒」と「民族固有の情緒」など、矛盾した概念が多く含まれている。また90年代までの「恨」研究には「恨」とはいかなるものかという本質論の議論しかなかったが、90年代に入りカルチュラルスタディーズの研究が盛んになると「恨」の存在を疑問視する論調も登場する。

これらの先行研究を受け古田は、「恨」を「悲哀の美」として認識する「解けない恨」、あるべき姿を模索する「解くべき恨」、あるまじき現状からあるべき姿への回復のプロセスと理解できる「恨プリ（恨解き）」⁽¹⁾などの概念に整理し、「恨」の成立時から00年代までの「恨」の議論を時系列で整理した。そして、そこから見られる時代によって変容する「恨」のイメージを考察した⁽²⁾。

「恨」は、古くは巫俗（シャーマニズム）の用語として、「死者のやるせない思いややり残したこと」という意味で使われ、「恨プリ」は鎮魂儀礼の一つであった。巫俗の「恨」「恨プリ」は韓国宗教史に大きな影響を与えている。朝鮮半島では日本の植民地統治時代（1910～1945）に多くの新宗教（民族宗教）が発生したが、その一つの甌山教には「恨プリ」を救済観にまで高めた「解冤相生」という思想が存在する。また植民地解放直後に発生したキリスト教系新宗教の世界基督教統一神霊協会（以下統一教⁽³⁾）では、「恨」を教義の中で一つのキーワードにしている。神やイエスは「恨」を抱いており、それをいかに解くかが教義の核心となっている。それ以外にも70年代に民主化運動を牽引したプロテスタント神学の一つである「民衆神学⁽⁴⁾」は、民衆の中に「恨」を見出し、神学は「恨の司祭」を目指すべきだと主張している。

川村湊は「韓国的イデオロギー⁽⁵⁾」の代表的な例として統一教の『原理講論』を挙げる。『原理講論』には、最も伝統的な精神文化である巫俗の自然観や霊魂観をはじめ、近代百年の苦難に満ちた近代史の体験が色濃く投影されており、『原理講論』はいわば民族の歴史体験によって〈血肉化〉された考え方に他ならない⁽⁶⁾と述べている。

古田は既に時代によって変遷する「恨」のイメージや定義を考察したが（古田：2005）、今回

は韓国土着キリスト教の中でも「最も韓国的」とされる統一教の教義を分析し、「恨」が宗教という現場においてどのように使われているのかを見ていく。

2. 統一教の概要と教義

2-1. 統一教の概要

統一教は正式名称を世界基督教統一神霊協会といい、1952年⁽⁷⁾に文鮮明によって韓国で創設されたキリスト教系新宗教である。宗教活動だけでなく、政治・経済・教育・学術・文化活動等を世界規模で展開し⁽⁸⁾、韓国社会では多大な影響を持つ教団である。韓国内では「宗教の仮面を被った政治集団」、「営利追求を目的とした経済組織」、「淫乱異端集団」などの批判がある一方、「韓国のイメージを海外に伝播するのに貢献した」という肯定的な評価もある⁽⁹⁾。1997年には「世界平和統一家庭連合」に改名し、キリスト教の枠を超え「真の家庭実現」を通じた「理想社会建設」の宗教連合団体へと姿を変えている⁽¹⁰⁾。

創始者の文鮮明は、1920年朝鮮半島の北部に位置する平安北道定州に生まれた。15歳の時に姉と兄が重い病にかかったのを契機に家族全員が長老派のクリスチャンになる。疾病と貧困による不幸、死に対する絶望などの人生について悩んでいた文は⁽¹¹⁾、16歳の時、祈祷の最中にイエスと霊通し、再臨主の使命を引き継いでくれるよう説得され、人類救済の「召命」を受ける⁽¹²⁾。文は22歳の時、早稲田大学付属高等工業学校電気工学科に入学するため日本に留学する。留学中は「神の実存」や「神と人間の関係」などの「原理」を究明した。また「反日運動」を展開して拷問されたこともあった⁽¹³⁾という。卒業後、鹿島組に就職するが、植民地解放後に帰国し「啓示」を重んじるキリスト教系少数派集団に属すようになる。26歳の時に「啓示」を受け、平壤で神からの啓示を重んじる「荒野教会」を設立する⁽¹⁴⁾。1948年「社会秩序紊乱」で警察当局に拘束され⁽¹⁵⁾、収容所で2年半生活した。韓国戦争勃発により釜山で避難生活を送り、1954年に「世界基督教統一神霊協会」という名で伝道を開始した⁽¹⁶⁾。「統一教」の成立初期には集会在深夜まで行われることから、既成教会から「性的問題」を噂されたり、教義の中に宗教儀礼としての「性的行為（血分け）」が見られると指摘されたりもした。1950年代には「梨花女子大事件⁽¹⁷⁾」で既成教会と世論から批判を浴びている。

1957年には全国に伝道師を派遣し、1961年には朴正熙の軍事独裁体制下、反共産主義思想⁽¹⁸⁾である「勝共思想」を展開し、政府から保護を受ける⁽¹⁹⁾。1958年には日本、1959年にはアメリカに宣教師を派遣し、1965年には世界40ヶ国を巡訪した。文は1972年には渡米し、以降アメリカを生活の拠点、日本を教団の経済基盤としながら世界宣教に力を注ぐ⁽²⁰⁾。

日本では1964年に宗教法人としての許可を受けており、世界で最も信徒数が多い。1966年に全国大学原理研究会（現CARP）が設立され、大学生や青年の伝道が活発化した。60年代後半から反共産主義政治運動結社である「国際勝共連合」は、自民党保守議員から庇護を受け勢力を拡散していく。80年代から国際的な宣教活動と関連事業の拡散のため会社組織を作り、物販で宣教活動に必要な財源を確保するようになる。韓国から輸入された高麗人参や大理石の壺などを訪問販売の形で販売したが、姓名判断や印相鑑定を絡めた商品の販売方法が「靈感商法」として問題化する。その他にも偽名勧誘やマインドコントロール問題、合同結婚式への強制参加など、多くの

民事訴訟が起きている。韓国では、日本で集めた潤沢な経済資金により、不動産やレジャー、サッカーなど幅広く事業を展開している。

2-2. 統一教の教義

統一教の教義は新旧約聖書と聖書を統一教的に再解釈した教義書『原理講論』、そして教祖のみ言葉選集⁽²¹⁾によって構成されている。統一教を知る上で最も重要な教義書は1966年に発刊された『原理講論』である。その内容は「創造原理」「墮落論」「復帰原理」の3つの内容に大別することが出来る。「創造原理」は神の存在、宇宙の創造、霊界について、神がいかにか人間を作ったかという創造目的について書かれている。「墮落論」は悪の存在、人間の墮落の起源について語っており、墮落を「人間始祖の誤った性行為」であると考えている。「復帰原理」とは人間の墮落直後から現在に至るまでの神の救済摂理史である。『原理講論』では、人類歴史を墮落した人間が神の前に戻っていく「救援歴史」として解釈し、人類歴史を古代ユダヤ史から現代史までを「一つの物語」として構築している。「救援歴史」とは墮落した人間を救うために神がメシアを送るための歴史であるとも説いている。神は2000年前にイエスをメシアとして地上に送ったが、人間の不信仰のために無残にも殺されてしまい、救いが完成されないままとなった。その神の「救援摂理」を完成するための再臨主が教祖である文鮮明であると信徒たちは信じている。

3. 神の「恨」（統一教の神観）

プロテスタント神学における神は「唯一絶対」「全知全能」「完全無欠」といった神の「超越性」を強調し、人間とは全く質の異なる存在である。それと同時に神は人間の祈禱を聞き入れ、人間を救い、歴史の中で働く「内在性」という特徴も持っている⁽²²⁾。

旧約聖書に登場する神は感情豊かで喜怒哀楽に満ち、人間に直接訴えていたが、古来から朝鮮半島で信仰されてきた巫俗（シャーマニズム）の神もそれと同様に、人間と距離が近い神であった。朝鮮半島全土で、これまで200以上の「巫俗神」が確認されており、王朝の創建人物や悲劇の英雄、自然にいたるまで、その神の種類は千差万別である。共通しているのは、民衆と「哀歎」を共にし、感情移入したり共感できたりする人間と身近な存在であることである⁽²³⁾。こういった神観は朝鮮半島で発生した新宗教の中にも継続して見つけることができる。19世紀に列強諸国が朝鮮半島に進出する時期に西学（キリスト教）に対抗する形で発生する東学は、唯一神をうたうが、「静かな神ではなく人間の声を聞き入れ、忙しく働く⁽²⁴⁾」神と捉えているし、植民地期に成立する甌山教は多神教で、人間と神が相互に影響を与え合い、人間と距離が近い。

統一教の神も天地創造の第一原因であり、唯一神であるが、プロテスタント神学の神と異なるイメージも強調されている。その大きな特徴は、神を「心情の神」と定義していることである。「心情」とは「愛を通じて喜びを得たいという心の発露⁽²⁵⁾」であり、その衝動のために神は「最高、最善の愛の対象」として人間を造り、人間の住む環境として宇宙を造った⁽²⁶⁾と考えている。「心情の神」という属性から人間との「交わり」を追求し、人間の行動によって左右され、「喜び嘆き悲しむ」存在である。神は人間のようにリアルに喜怒哀楽を感じることを強調し、神を擬人化している。また魚谷は統一教の神を「絶対者でありながら、被造物（人間）との関わりの中

で生きることにより、自らを相対化させた⁽²⁷⁾と述べている。統一教では、神と人間との「関係性」を強調するが、それは単に近いということだけではなく、その関係とは「親子の関係」であると明示している。

統一教では人間始祖アダムは神の「息子」であり、アダムが完成すれば神の宮となり、体を持った神自身となるはずだった。神の願った理想世界は「神人愛一体の絶対愛の世界⁽²⁸⁾」であった。その世界は、アダムがエバと結婚し、善なる子女を生み、神が永存の「父母」の位を実体的に確定し、また神が人間の血統を通して子々孫々と繁栄する社会⁽²⁹⁾であった。加地は儒教の孝思想は「祖先祭祀」「父母敬愛」「子孫繁栄」の三つの行為を一つとするものであり、祖先から自己を経て子孫に繋がる永遠の命という思想によって、死と死後について説明する論理体系である⁽³⁰⁾と説明する。

統一教の理想世界とは、前述した先祖を祭祀する「祀り手」が子々孫々と続くことを願う、血統主義を重んじる「儒教的な世界観」をなぞらえている。これは理想世界を「愛の絶対圏理想である真の単一宗族圏を作る⁽³¹⁾」という儒教的な語りにも如実に現れている。

しかし人間始祖アダムとエバは、神の創造目的に反して墮落し、原罪を背負うことになる。統一教では原罪を「不倫なる性的な血縁関係を結んだこと」と説いている⁽³²⁾。統一教の示す失樂園の物語を要約すると以下のとおりである。

神と共に宇宙を作っていた天使長ルーシエルは、アダムとエバが生まれると、神がアダムとエバに夢中となり、嫉妬（「愛の減少感」）を感じるようになる。天使長は寂しさを紛らわすためにエバに近づき誘惑し、二人の間が男女の関係（「霊的墮落」）となる。天使長と「姦淫した」という事の重大さにエバは気づき、さらにアダムと性的な関係を結ぶ（「肉的墮落」）。

つまり人間始祖の墮落の理由を「サタンとなった天使長ルーシエルとエバとの間の姦淫」と、「アダムとエバの不倫（性行為）」⁽³³⁾と捉えている。墮落によって本来の神の善の血統を繁殖することができずに、悪の血統がアダムとエバを経て子々孫々に遺伝され、人類すべてに相続されたと考える⁽³⁴⁾。そのため統一教では、愛（性的な関係）は神が喜ぶ最も尊い聖なるものであったが、墮落によって神が悲しんだために、性行為に対して非常に厳格であり、不倫はもちろんのこと結婚以外の性交渉や婚前交渉もタブーとなっている⁽³⁵⁾。心情の神は最愛の被造物である人間の墮落にひどく心を痛める。その時の神を文鮮明は以下のように語る。

歴史的な罪を犯し、それほどまでもあなたの胸にくぎを打ち、あなたの人格とあなたの体面にこれほどまでも許しがたい傷を負わせた人間たちであるにもかかわらず、あなたは誰にもその事情を吐露することが出来ない寂しい心情を一人で抱いてこられ、天と地をあなたの喜びの土台をもって踏むべきであるにも関わらず、連続的な日々を恨と悲しみの土台をもって踏んできたあなたの事情を、今、この地上の取るに足らない少数の群れたちではございますが、理解しました⁽³⁶⁾。（強調は古田。以下の引用も同様。）

神様が造ったこの宇宙のために、墮落した人類のために、今も涙を流しているということですよ。なぜそうなのでしょう。心情の神様であるためです⁽³⁷⁾。

人間の墮落後、喜怒哀楽を感じる「心情の神」は、ひたすら「哀」の感情ばかりを持ち続け、それが六千年の長きにわたって続いている。これがすなわち「神の恨」である。また統一教では人間の墮落により神の創造理想が果たされず、神と人間の断絶が生じたことを「恨」の原因と捉えている。また「実子」であった人間が墮落により、実の父母（神）が分からない「僕の僕」の存在になってしまったという。これは具体的に神と人が親子でなくなってしまったことを意味する。「救援摂理」によれば人間は「僕の僕」から「僕」、「養子」、「実子⁽³⁸⁾」という段階を通過して神と親子の関係に戻っていく⁽³⁹⁾と説いている。これが後述する「救援摂理」であるが、「神との関係性」にヒエラルキーを設けているのは、「儒教の別愛」的な発想である。「別愛」とは「博愛」との反対概念で、最も親しい人を最も愛し、親しさに比例してその愛情の度合いが減っていく「区別愛」である⁽⁴⁰⁾。「親子であるべき関係」が「あるまじき関係」、すなわち「主人と僕の関係」になったことが「神の恨」であり、人類の墮落以降、神は悲哀の感情を持ち続けているという。

4. 神の「恨プリ」（統一教の救済観）

神は自分自身と被造物の「恨」を解くために、人類が墮落した直後から創造理想を取り戻す「救援摂理」を展開してきた⁽⁴¹⁾。この神の「救済摂理」を、墮落した人間が神の前に戻る「復帰摂理」と呼ぶ。『原理講論』の後半部分にはまさに神が一刻も早く人類にメシアを遣わして救済しようとする「神の摂理の軌跡」が描かれている。ノア、アブラハム、モーセなど旧約聖書の物語を、メシアであるイエスを迎える基盤と考え、神はメシアを迎えるために個人、家庭、民族、国家、世界の順で段階的に神の勢力を拡大してきたと語っている。そして神が人間を救うために準備したメシアが、まさにイエスであった。統一教のイエス観は、既成教会の神学者からは「異端的理解」と捉えられている。統一教はイエスをどう理解しているのか。また既成教会のイエス観とはどのような違いがあるのか。

4-1. イエスの「恨」（統一教のイエス観）

統一教ではイエスを、完全な人格と神性を備えた三位一体の存在とは捉えていない。イエスは心情的には神と一体であるが、祭祀長ザカリアとマリアの間に生まれた「原罪のない人間」であるという。イエス（＝メシア）の使命は、人間始祖アダムの墮落によって果たせなかった地上天国を成すため、墮落によって汚れた人類の血統を新たに生み直し新しい神の血統を残すことであった。つまりメシアは独身ではなく結婚し、アダムとエバが果たせなかった「真の父母」となり、原罪のない神の血統を子々孫々に絶やすことなく世界中に拡散させる使命を持っていた⁽⁴²⁾。

彼（イエス）の第一の目的は、花嫁を復帰して、最初の神の家庭を作ることにあつたのです。そしてすべての墮落人間が真のオリーブの木である彼に接木され、神を中心とした家庭、氏族、国家が、そのようにして復帰されていくはずだったのです。（中略）イエスは第二のアダムでした。彼が復帰された花嫁である第二のエバと天的結婚において祝福されることが、神の願いであつたのです。神は彼がこの地上の罪の無い子を生み増やすことを願われたので

す。そしてイエスとその花嫁は人類の真の父母となるはずだったのであり、全人類は彼らに接木されることによって生命が蘇るはずだったのです⁽⁴³⁾。

しかし文は、イエスは家族も含めたイスラエル民族によって、メシアとしてはとても惨めな生活を送ったと語る。

イエス様が大きくなった頃に兄弟たちが生まれ育っていましたが、イエス様を蔑視しました。よく考えるとイエス様は義理の息子になりますね。ですからイエス様の兄弟は（ヨセフの）本当の子供になります。それでマリアとヨセフはイエス様のことで喧嘩が絶えませんでした⁽⁴⁴⁾。

イエス様がこの地に来られお亡くなりになるまでの人生は、今日の地上に住んでいるどの人よりも厳しいものでした。誰よりも難しい位置、誰よりも寂しい生涯を生きられました。（中略）イエス様は言うに言えない悲惨な生活をされました。誰一人として友人はおらず、自分の悲しみを吐露できる人はいませんでした。このようにイエス様はどこの誰よりもかわいそうな人生を歩まれたのです⁽⁴⁵⁾。

そして、イスラエル民族はイエスを信じて従わないばかりか十字架刑で殺害するという「悲劇」を起こした。統一教では、十字架刑によって神の摂理が失敗に終わったことを強調する。十字架による死を迎えたことで、イエスがその子孫を生み増やすことができなくなったからである。だからこそ、統一教は、キリスト教を名乗りながらも十字架を教団のシンボルとしていない⁽⁴⁶⁾。文鮮明は説教の中でイエスについて以下のように語っている。

イエス様の恨とは何か。家庭を成すことができなかつたことが恨なのです。宗族を形成できなかつたことが恨なのです。（中略）この恨を解いてあげなくては、人間の救援は成されないのです⁽⁴⁷⁾。

もしイエス様が家庭を持ったなら子供を作ったでしょうか。イエスが神様の独占者ならその息子娘は何ですか。神様の孫です。神様も孫が生まれることを喜びますか、喜びませんか。人間と同じなのです。神様の愛を受けた孫がいて、その孫の息子は何ですか。ひ孫、ひひ孫とずっと続くのです⁽⁴⁸⁾。

以上の引用から考えれば、統一教というイエスの最大の「恨」とは、「結婚すべき」なのに「結婚できなかったこと」である。神の一番の願いは、子なるイエスが結婚して子孫を生み増やし、イエスを族長とした宗族を繁栄させ「地上天国」を成すことにあったと説明する。

統一教が結婚にこだわる理由は伝統宗教の視点からも説明可能である。韓国の伝統社会をよく「儒教と巫俗の二重構造」として捉える。近世の朝鮮半島では儒教（性理学）的な価値観が国家運営から民衆の倫理道徳までを支配していた。しかしその深層部には古来からの巫俗の伝統が横

たわり、儒教と相互補完関係を形成しながら存在していた。儒教倫理に照らし合わせて考えると、「子供を残さず死んだ者」は祭祀を受けられず怨霊となると考えられている。そのため巫俗は、儒教世界で引き受けられない死者を一手に引き受け、巫俗式の鎮魂祭や死後結婚を行う。したがって韓国の伝統社会の中でイエスを捉え直せば、イエスは未婚で33歳の若さで死んだ鎮魂の対象者となる。結婚し子を立てて血統を残し天寿を全うするのを理想とする儒教社会では、独身を貫いて死んだイエスの生涯は望ましいものではない。クリサイデイスは、キリスト教では人類の贖罪のためにイエスは十字架刑に架けられていたとされているが、「巫俗」から見ると、一人の若者（イエス）が未婚で哀れな死を迎えたために、その怨恨を解くために教会に祀っていると解釈できるという⁽⁴⁹⁾。崔吉城も、「巫俗」の視点から見るとイエスは「死後結婚」や「シッキムクク（古田補足：巫俗の鎮魂祭）」を必要とする人物であり、イエスは「巫俗神」として祀られてもおかしくない存在だと述べる⁽⁵⁰⁾。

「イエスの恨」は幼いころから恵まれない家庭環境で育ち、イスラエル民族に迫害されるという「哀れな生涯」を生きたことである。そして結婚し、子供を作り「神の血統」を地上に繁栄させるという「あるべき理想」が実現せず、殺害されてしまったことの2つに集約できる。その姿は朝鮮時代の將軍崔瑩の様な、やるべきことを残し、無念な思いを抱いて死んでいった巫俗神と重なる。怨念を抱く巫俗神は日本の「御霊信仰」にも通じるが、統一教のイエスは將軍崔瑩や平将門のように崇めない。再臨の主が来るまで2000年間、「恨」を抱き続けながら静かにその時を待っていたという。

4-2. 選民（韓民族）の「恨」

統一教はイエスの十字架の贖罪を靈的な救済のみが成された「不完全なもの」と考え、イエスのメシアとしての使命を「失敗」と捉えている。神は4000年の歴史を経て、初めて送ったメシアが人間たちによって殺され、さらに「恨」に充ちるようになった。神は人間の救援を完成させる再臨のメシアを送る摂理を続ける。統一教は人類歴史を善悪二元論の立場から世界史的、世界政治史的な視点から捉える「神とサタンの闘争史」という一つの物語を構築している。『原理講論』はイエス以降の人類2000年史（文芸復興、産業革命、第一次、第二次世界大戦など）をそれなりの整合性と体系性をもって説明し、その人類歴史の目的は、メシアを迎える準備期間であったと解釈している。そして『原理講論』のクライマックスには、人類がいつどこで再臨のメシアを迎えるかという内容が記されている。結論を急いでしまえば、神が選んだメシアを迎える選民は朝鮮半島に居住する朝鮮民族であり、メシアは文鮮明であると主張する。朝鮮民族が選ばれた理由は以下のとおりである。

選民になれる国は、東方の国（日本、中国、韓国）でなければならず、イスラエル民族のように単一民族で小さくしなければならず、メシア思想を伝統的に持っていなければならないとしている。それよりももっと大切な条件は、「神の心情の対象」となる国でなければいけないという点である。

韓民族は悲運の歴史を綴ってきた恨の民族です。韓国は長い間貧しく、周辺強大国の非常に

強い勢力の狭間で侵略と蔑みを受けなければならない運命の道を免れることができませんでした。漢族と満州族、蒙古族、そして日本に対してそうでした。外勢の侵略を受ける度ごとに、数多くの人々が血の涙を流し、恥辱の痛みを受けました。そうする中でも、この民族は決して天を捨てませんでした。国家の運命と共に、自分たちの悲惨な時代的運命を宿命のように感じながら、天を仰ぎ精誠と祈祷の祭壇を築いてきた民族です⁽⁵¹⁾。

韓国の五千年の歴史は苦難と試練の歴史でした。韓国は長い間貧しく、外勢の虐げの中で涙の味を知り、悲しみの味を知る民族でした。苦難の歴史の中で試練を受けてきた韓国の事情は墮落した人類、すなわち死んだ息子を見て嘆息する神様の事情と同じです。韓国人たちは涙の味を知っています。だから涙の神様を理解することができるのです。韓国人は古来より悲劇を好みました。／それがすなわち墮落という悲劇を味わった神様を同情することができる資格です⁽⁵²⁾。

つまり一度も自ら攻撃をせず、常に打たれてきた悲しい神と同じような苦難の歴史を持つ民族こそ、神の「恨」を理解できるために選民となれるという。他の東方国家である日本はアジア諸国を侵略したという理由から、中国は神を否定する共産主義大国という理由で「選民」からはずされている。

また統一教は人類歴史を神とサタンの闘争史として描いているため、メシアが誕生する地は神とサタンの対決の最前線でなければならないと考えている。

ところで、韓民族は天宙復帰のため、この一線に置かれた民族的供え物であるが故に、あたかもアブラハムが供え物を裂かれなければならなかったように、この民族的な供え物も裂かなければならないので、これを38度線で裂き、「カイン」「アベル」の2つの型の民族に分けたのである。従って、この38度線は民主と共産の一線であると同時に、神とサタンの一線ともなるのである。それゆえ、38度線で起きた6・25動乱は国土分断にもとづく単純な同族の抗争ではなく、民主と共産、2つの世界間の対決であり、さらには神とサタンとの対決であった⁽⁵³⁾。

朝鮮民族が選民となった理由は、民族宗教が持つどこにでも見られる、自文化優越主義的な偏狭的ナショナリズムといえるが、その論拠の一つに‘恨’を挙げている点は注目に値する⁽⁵⁴⁾。川村湊は統一教の選民思想について「自民族、自国の優越を信じるショーベニズム的イデオロギーの中に、『民族の供え物』といった屈折した宿命観」が存在すると指摘する⁽⁵⁵⁾。

李御寧は80年代に活躍した韓国文化論者、日韓比較論者である。李御寧の「恨」論は、文学界の「情恨論」がベースとなっており、社会的に大きな影響力を持っていた。日韓比較文化論者らしく韓国の属性を「恨」、日本の属性を「怨」に当てはめて、両国の古典である『春香伝』と『忠臣蔵』を用いながら「恨」の議論を展開していく。そして『忠臣蔵』は仇を討つという「暴力に根ざすネガティブな復讐劇」と捉え、日本人の心の秘部は「怨」であるため、仇討ち話を好むとする。そして韓国の「恨」の文化を以下のように説く。

「恨」の文化とは虐げられ、踏みにじられながらも、美しく、穏やかな、あの望ましい世界—絶対に実現される証しのなかった心の世界—を目指していく文化なのだ。(中略)なぜ韓国人はあんなに情深いのか?憎しみで仇を討ち、圧制者を懲らしめても、なお物足りない、口惜しい歴史の流れの中に溺れているのが韓国人だが、なぜあんなに骨なしのように柔軟なのか?繰り返して言うならば、いくら苦しくても、正しく、平和に、愛を持って生きていく彼岸への望みを捨て去ることができないからなのである。／絶望だけではまた希望だけでは、恨の文化は生まれてこない。「恨」の文化は暗闇の中で初めて見える星の光である。(中略)栄光の歴史、誇りの社会で生きた人は、愛し合い、和やかにつましく生きることが何かを知らない。真実の願いを知らない。⁽⁵⁶⁾

以上の引用は、「自らがどんなに弱くても戦いを挑む藩主への忠義」を描いた『忠臣蔵』を、「仇討ち」という殺傷を伴う野蛮性へと焦点をずらしてしまったが、「怨」のイメージを「恨」の対立概念とし、「恨の文化」は日本の「復讐文化」とは異なり、相手に向かわない「高尚な文化」であると説いている。受難の韓国史に「恨」というフィルターをかけ、受難を「聖なるもの」へと昇華させている。

統一教の「選民の恨」と80年代の文化ナショナリズムの「李御寧の恨」の共通点は、他国と比べながら、「恨」を持たざるを得なかった韓国の宿命的な歴史観、弱弱しい屈辱的な歴史体験によって作られた「恨の民族性」こそが、最も高尚な聖なる象徴、文化で、神へと通じるものと語る。そこには「受難の歴史」こそ「聖なるもの」というパラダイムの転換が存在する。

統一教の教義では、神、イエス、選民は、すべて「恨」を抱いているとしている。「神の恨」は、姦夫ルーシエルのために、本来「親子であるべき」神と人間との関係が破壊され、神と人間は「親子ではない」関係になったことにある。このため、人間と同じように喜怒哀楽を感じる神は、六千年間、「哀」の感情に支配されてきたという。ここには「あるまじき姿」から「あるべき姿」へと戻りたいという神の切なる願望が存在し、「解くべき恨」を抱えているといえる。「イエスの恨」は、「結婚して神の血統を残すべき」だったのに、家族やイスラエル民族の迫害によって、「結婚できずに(血統を残せずに)死ぬ」という「恨」を抱えている。これも上記同様、「あるまじき姿」から「結婚した姿」へ戻る願望が存在する。またこの「恨」は、巫俗で、不遇の死者が抱える「恨」の捉え方とも共通する。若くして未婚で死んだ青年は、もっとも「恨」が多いケースの一つで、鎮魂儀礼を必要とするケースである。「選民の恨」は、外国からの侵略という「受難の歴史」を「聖なるもの」と捉えるという逆転の発想をすることで、「受難は聖」という構造を作り上げる。これは「悲哀は美」と捉えた「情恨」の「解けない恨」といえよう⁽⁵⁷⁾。

4-3. 復帰摂理と解怨思想

ここからは「恨を解く」視点から統一教の教義にアプローチしていく。統一教の教義上での最終目的は悲しい歴史の清算と「恨の神」の解放である。文鮮明は自分の人生の目的を以下のように語っている。

天にいらっしゃる人類の父は子を亡くされた父母と同じ立場であり、悲しみの恨に覆われていることを私は発見しました。私の人生の目的は神の中にある恨を解いてさしあげる事です。その悲しみの神様を悲しみと苦痛と苦悩から解放して差し上げることが私の生きている目的です。私がしてきたすべての事はそれが宗教活動であれ言論であれ、経済であれ、政治であれ、企業であれ、その全ての動機はそこに出発しているのです⁽⁵⁸⁾。

統一教では前述したとおり、原罪のないメシアが結婚し、サタンの血統から断絶した神の血統をつくり、また実質的なメシア王国を地上に誕生させようとしている⁽⁵⁹⁾。10年以上前、日本のマスコミを騒がせた合同結婚式は原罪を清算し、新たなる神の血統を作り出す結婚という重要な宗教儀礼であった。また統一教が宗教活動以外にも様々な活動をしていることは周知の事実だ。世界平和宗教連合、青少年純潔運動本部、国際勝共連合をはじめとした関連団体や、世界日報、一心病院、世一観光、一和などの関連企業は世界中に多く存在する⁽⁶⁰⁾。これほど熱心に事業を展開するのは、イエスが成せなかった地上天国（天国となるためには、人間だけでなく万物も復帰しなければならない）を作る使命を再臨のメシアが代行すると考えているからである。

このような「恨を解く」という思想は、巫俗をはじめ、近代化の過程で発生した民族宗教（新宗教）の中に広く見られるものである⁽⁶¹⁾。

黄善明は、朝鮮の巫俗神の中で、崔瑩將軍、端宗などの非業の死を遂げた英雄や王様が神として取り入れられたのは、彼らがやるせない思い、「恨」を抱いて死んだ運命を、社会的な抑圧の中で「恨」を抱えている民衆が支持したからであり、巫俗儀礼の「賽神クツ」の中で「解冤クツ」が行われるのも同じ文脈であるとしている⁽⁶²⁾。巫俗では「怨霊の恨」を解く儀礼を「恨プリ」と呼ぶ。また韓国宗教史の中で、事故死や、早死、溺死など不可解な死や非業の死を遂げた民衆の鎮魂を行う鎮魂祭の担い手は巫俗であった。韓国人の死生観では、子孫を残さずに死んだ者は祭祀を受けられず怨霊となると考えられており、巫俗では、怨霊に対する鎮魂祭や死後結婚が行われてきた。

統一教では、死後結婚に似た儀礼をイエスに施している。文鮮明は、1973年1月3日に、「結婚できなかった」イエスとアメリカ在住の韓国人女性信徒とを結婚させている⁽⁶³⁾。また次の引用では、「哀れなイエス」の鎮魂（「恨プリ」）について、信者に説いている。

イエスが生前なせなかったその全てのつらい胸の内を、神様の愛を受けた独占者としての心苦しい胸の内を、今日の我々は彼と同じ心情の次元にまで登りつめて、地上においてイエスを解怨成就しなくてははいけません。この世でもムーダンたちが恨プリをするでしょう。この世の悪神もやるのに、善なる神の息子イエスにも恨プリをしなくてははいけません⁽⁶⁴⁾。

巫俗の「恨プリ」は、その対象が個人である場合がほとんどである。またその効果は、喪失感を埋めることであり、マイナスのメンタルを正常に戻す「癒し」効果に留まる。しかし民族宗教に見られる解怨思想は、その次元を個人から社会、世界の救済へと拡大させ、マイナスを正常に戻すことに留まらず、さらにプラスの方向に向かっており、再創造を行う改革思想へと発展して

いる。

甌山教は姜甌山（1871－1909）が設立した民族宗教である。東学農民戦争失敗後の社会的混乱の中で、自らを絶対主とする姜甌山が人間世界を救うために「降世」したとする。彼は三界大権を主宰し、調和を持って天地を開闢し、不老長生の「仙境」を開き民衆を救うために来たと言った。その宗教的世界観には仙、仏、儒、巫などの伝統宗教の影響を色濃く受けており、救済観（「解冤相生」）には解怨思想が見られる。

甌山教の思想の中で最も特徴的なものは、「解冤相生思想」である。歴史上、人類のすべての宗教と文化、制度と原理が互いに排他的で相克の枠を超えられないまま激しく対立しながら、人類歴史は数多くの戦争で血に染められてきた⁽⁶⁵⁾。そこから多くの「怨恨」が蓄積されるようになった。「怨恨」を抱いて死んだ人間は靈魂の怨力の作用によって「怨鬼」となり、地上世界をさまよいつつ害悪作用の原因となって人間に害をもたらし、社会の秩序を妨害してきた。その「怨鬼」を解放し、歴史の方向を展開させ、新しい歴史を創造するために、姜甌山によって行われた宗教儀礼が「天地公事」である。

趙載国は、甌山教の「解冤相生思想」は、巫俗の死者中心の「怨恨」概念から発展したものであると考えている。巫俗で全ての禍の原因といわれる「怨恨」を教理の土台にし、その解明及び解決の方法として「天地公事」や致誠儀式を行う。既存の巫俗信仰の「解怨」は個人的次元あるいは家族的次元であるが、甌山教では集団的かつ普遍的次元で図っており、また「解冤」に留まらず平和共存的な相生へと導くとしている⁽⁶⁶⁾。

統一教も、甌山教の「天地公事」のような世界の「解怨」の宗教的象徴儀礼（たとえば75年「総解怨式」78年「統一解怨式」98年「地獄解放と天国開門宣布」98年「転換的な万物解放の日宣布」など）を幾度となく行っており「天の歴史路程は解く歴史路程⁽⁶⁷⁾」だと語り、歴史の中の「解怨」を強調している。

5. まとめと今後の課題

統一教の教義の中で、「恨」はまず最高神に表れる。神を人間とまったく変わらない喜怒哀楽を感じる存在に擬人化して捉え、中でも人間の墮落ゆえに「哀しみ」の感情に支配されてきたことを説明する。そしてその「哀しみ」の原因を究明している。神と人は「親子の関係」であったのに、墮落によって「親子でない関係」になったこと、元の「親子の関係」に戻りたいという切なる願望が神の「哀しみ」である。したがって人類歴史は、神の理想を成就するための「神の恨プリ」の歴史となる。『原理講論』は、「神の恨プリ」を行う使命を担ってきた各時代の中心人物、またイエスについて語っている。しかし救援摂理は失敗の連続で、「神の恨」は歴史と共に増大してきた。そしてついに再臨主を迎える時代が到来したが、再臨主を迎える地、選民の国は、常に外国に虐げられ受難の歴史を持つ力弱き民族であるべきで、それはまさに韓民族であると語る。こうしてメシアは韓国に生まれ、世界は韓国を中心に救われていくという民族主義的な壮大なストーリーが展開される。再臨主とされる文鮮明は、世界的に統一運動を繰り広げ、90年代後半には「神は解放」され、「恨は解けた」と説いている。

川村は、「巫俗の自然観や靈魂観」と「苦難に満ちた近代史の体験」から生まれたものを「韓

国的イデオロギー」と名付け、その思想を掲げた代表例として統一教を挙げていた。この「韓国的イデオロギー」は、巫俗の「恨プリ」的思考、苦難の歴史がもたらす「情恨」の情など、「恨」という言葉でまとめ上げることができるだろう。

実は統一教は、90年代後半にがらりと姿を変えてしまう。冷戦構造が崩壊し、勝共運動が頭打ちとなった後、それまでは回避してきた「先祖の怨念」「従軍慰安婦の恨」といった民俗宗教的な霊的怨念の世界がクローズアップされ始め、教義や信徒の信仰生活が死者の鎮魂へとシフトしていく。もともと韓国キリスト教の周辺には、教義上で「恨」を語ることはなくても、信者の生活レベルの問題として、病氣治しをはじめ先祖の解怨といったシャーマニスティックな世界観を組み込んだ事例がたくさん報告されてきた。統一教でも、神、イエス、選民に「恨」があるという教義上の「恨」が、信者の生活に密着した「恨」へも回帰していったのかもしれない。ここに、日本で社会問題化された「靈感商法」といわれる先祖の因縁商法なども関わってくるのであろうが、それは今後の研究とする。

註

- (1) プリとは動詞・(プルダ：解く)の名詞形で「解き」
- (2) 植民地時代の「恨」のイメージは「悲哀の民族性」であり、上(日本)から押し付けられたネガティブなものを自ら自己のイメージへと作り上げていく。そのイメージを継承した形で60年代の文学では、この植民地主義的な産物である「恨」のイメージを有史以来の韓民族の民族性として捉え、「恨は解けない」ものであり、「恨は悲哀に充ちた高尚な文化である」といった議論が続く。70年代に入ると「恨」のイメージはがらりと変わる。軍事独裁政権時代は民主化運動のシンボルとして「恨」を捉え、「恨」は抵抗エネルギーの源であり、独裁政権から虐げられた民衆の「怨恨」というイメージを持ち「恨」は「解くべきもの」に変容していく。民主化後の80年代には文化ナショナリズムが高揚する。「恨」は伝統文化のシンボルとして、「恨は解消され、解くことが出来る」ポジティブなものとして解釈される。(古田「恨」の系譜—「恨」思想から見る韓国近現代社会)
- (3) 世界基督教神霊協会の日本での略称は2つある。信者や一部の研究者は「統一教会」、それに反対するグループは「統一協会」を使う。本研究では名称に当事者の価値観が入りやすい側面と、主に韓国の事例を見ていく関係から、韓国で使われている略称「統一教」を使うこととする。
- (4) 「解放神学」の影響を受けて民主化や産業化による社会問題を訴えたプロテスタント実践神学。保守神学とは異なり、政治的・経済的・社会的な問題を訴え、神学を韓国文化の脈絡の中で捉えようとした。
- (5) これは一つの体系化された思想や、哲学体系ではなく韓国人が精神の底辺で共有しているもの。
- (6) 川村湊(1988)「韓国の<底>にひそむもの」、『ソウルの憂愁』、草風館、p.160.
- (7) 財団法人の許可は1963年
- (8) 廬吉明(1996)『韓国新宗教の研究』、経世院、p.207.
- (9) 李チング(2000年3月)「韓国新宗教史の立場から見た統一教」、『韓国基督教歴史研究所消息58号』、p.5.

- (10) 柳炳徳（2000）『近・現代韓国宗教思想研究』マダン企画，p.323.
- (11) 世界基督教統一神霊協会編（1978）『統一教会史（上）』，成和出版社，p.25.
- (12) 世界基督教統一神霊協会編（1978）『統一教会史（上）』，成和出版社，p.13.
- (13) 世界基督教統一神霊協会編（1978）『統一教会史（上）』，成和出版社，p.41.
- (14) 世界基督教統一神霊協会編（1978）『統一教会史（上）』，成和出版社，p.39.
- (15) 世界基督教統一神霊協会編（1978）『統一教会史（上）』，成和出版社，p.48.
- (16) 世界基督教統一神霊協会編（1978）『統一教会史（上）』，成和出版社，p.95.
- (17) キリスト教系大学の教授と学生が大量に「統一教」に入会した事件。この時期「血分け」の噂が「統一教」に付きまとっていた。
- (18) 戦後韓国新宗教の一つの特徴である。
- (19) 村上重良（2000）「統一協会，原理運動」項目，『世界宗教事典』，講談社，p.270.
- (20) 李チング（2000年3月）「韓国新宗教史の立場から見た統一教」，『韓国基督教歴史研究所消息58号』，p.5.
- (21) 『み言葉選集』は1955年から現在まで刊行されており，その数が300冊を超える。最近は今まで教祖が語った「み言葉」を主題別に編集したものが随時刊行されてきており，それを信仰生活の中で読んでいる。
- (22) 黄ピルホ（1986）「統一教の神観」『宗教研究』，韓国宗教学会 p.112.
- (23) 趙興胤（1997）『巫－韓国巫の歴史と現状』民俗社，p.170.
- (24) チェ・ジョンソン（2004）「侍天主の思想－東学の神学と人間学」『宗教学研究』23号，p.120.
- (25) 魚谷俊輔（1997）『神学論争と統一原理の世界』，光言社，p.121.
- (26) 神を心情の神として規定することによって，神の宇宙創造に対する必然的な理由が合理的に説明できるとしている。
- (27) 魚谷俊輔（1997）『神学論争と統一原理の世界』，光言社，p.121.
- (28) 公言社編（1997）『救援摂理史の原理観』，公言社，p.9.
- (29) 公言社編（1997）『救援摂理史の原理観』，公言社，p.13.
- (30) 加地伸行（1990）『儒教とは何か』中公新書，p.223.
- (31) 世界平和超宗教超国家連合他編（2005）『神様は真の父母・真の師・真の王』，出版社未定，p.13.
- (32) 世界基督教統一神霊教会（1993）『原理講論』（普及版）光言社，p.104.
- (33) エバの天使との霊的性行為と，墮落したエバとアダムの性行為。
- (34) 桜井義秀（2005）「統一教会」項目，井上順孝編集『現代宗教辞典』，弘文堂，p.385.
- (35) 韓国の統一教系大学である鮮文大学には純潔学科という学科があるほどである。
- (36) 世界基督教統一神霊教会編（1993）『文鮮明先生の祈祷』，成和出版社，p.383.
- (37) 文鮮明（1985）『み旨と世界』，公言社，p.2（序文）.
- (38) 「僕の僕」「僕」，「養子」「実子」「新婦（エバ）」「新郎（アダム）」「父母」「神」の8段階のプロセスを踏んで神の元へ帰っていく。
- (39) 世界平和統一家庭連合編（2004）『真の信仰とみ旨の道』，成和出版社，p.303.
- (40) 加地伸行（1990）『儒教とは何か』中公新書，p.70.
- (41) 魚谷俊輔（1997）『神学論争と統一原理の世界』，光言社，p.127.

- (42) 世界基督教統一神霊教会 (1993) 『原理講論』(普及版), 光言社, p.257.
- (43) 文鮮明 (1985) 『み旨と世界』, 公言社, p. 278.
- (44) 成和出版社編 (2002) 『イエス様の生涯と愛』, 成和出版社, p.177.
- (45) 成和出版社編 (2002) 『イエス様の生涯と愛』, 成和出版社, p.258.
- (46) 魚谷俊輔 (1997) 『神学論争と統一原理の世界』, 光言社, p.157.
- (47) 文鮮明先生み言葉編集委員会「結婚をしなけりばならなかつたイエス」『文鮮明先生み言葉選集』58巻, 1972年6月6日付け説教を<http://truelove.new21.net/Malsm/037/FWKIK.htm>から引用 (確認日2005年9月25日)
- (48) 文鮮明先生み言葉編集委員会「イエスが家庭を持っていたら」『文鮮明先生み言葉選集』292巻, 1998年4月17日付け説教を<http://truelove.new21.net/Malsm/037/FWKIK.htm>から引用 (確認日2005年9月25日)
- (49) ジョージ・D・クリサイディズ (1993) 『統一教会の現象学的考察』, 新評社, p.178.
- (50) 崔吉城 (1987) 「「巫俗」から見た西洋文明の衝撃と受容」『伝統文化と西洋文化Ⅱ』成均館大学出版部, p.244.
- (51) 世界基督教統一神霊教会編 (2000) 『神様の摂理から見た南北統一』, 公言社. p.283.
- (52) 世界基督教統一神霊教会編 (2000) 『神様の摂理から見た南北統一』, 公言社. p.243.
- (53) 世界基督教統一神霊教会 (1993) 『原理講論』(普及版) 光言社, p.590.
- (54) 統一教は韓国がすべての文明の中心となり, 韓国語が世界の言語になると主張する。
- (55) 川村湊 (1988) 「韓国の<底>にひそむもの」, 『ソウルの憂愁』, 草風館, p.192.
- (56) 李御寧『韓国人の心 - 恨の文化論』, 学生社, p.270~271.
- (57) しかし「解けない恨」といっても教義書である『原理講論』の最後には「恨の民族」である韓民族がメシアを迎え, 地上天国が完成すれば韓国は世界の中心となり, 韓国語は世界の祖国語となると述べている。
- (58) 成和出版社編 (1999) 『真の父母様の生涯路程1』, 成和出版社, 裏表紙 (強調引用者)
- (59) 『原理講論』p.508には「全人類が神の心情に帰一することにより, 一つの理念を中心とした経済の基台の上で, 創造理想を実現する政治社会が作られるはずであるが, これがすなわち共生共栄共義主義に立脚したメシア王国なのである」と述べている。
- (60) 桜井義秀 (2005) 「統一教会」項目, 井上順孝編集『現代宗教辞典』, 弘文堂, p.385.
- (61) 廬吉明 (1988) 『韓国の新興宗教』カトリック新聞社, p.157.
- (62) 黄善明 (1992) 『朝鮮朝宗教社会史』, 一志社, pp.272~273.
- (63) 文鮮明先生み言葉編集委員会「統一教会家庭が霊界に行けば」『文鮮明先生み言葉選集』38巻, 1971年1月3日付け説教を<http://truelove.new21.net/Malsm/038/FWKIK.htm>から引用 (確認日2005年10月3日)
- (64) 文鮮明先生み言葉編集委員会「イエスの恨を解こう」『文鮮明先生み言葉選集』37巻, 1970年12月25日付け説教を<http://truelove.new21.net/Malsm/037/FWKIK.htm>から引用 (確認日2005年10月3日)
- (65) 趙載国 (1998) 『韓国の民衆宗教とキリスト教』新教出版社, p.137.
- (66) 趙載国 (1998) 『韓国の民衆宗教とキリスト教』新教出版社, p.189.
- (67) 世界基督教統一神霊教会編 (1993) 『文鮮明先生の祈祷』, 成和出版社, p.259.

〈参考文献〉

日本語

- 古田富建（2005）「『恨』の系譜－『恨』思想から見る韓国近現代社会」（水曜ゼミ発表論文）
（2006）「韓国の死霊信仰と鎮魂（恨プリ）」、『現代宗教』，東京堂出版，pp.226~252.
- 川村湊（1988）「韓国の＜底＞にひそむもの」、『ソウルの憂愁』，草風館
- ジョージ・D・クリサイディズ（1993）『統一教会の現象学的考察』，新評社
- 魚谷俊輔（1997）『神学論争と統一原理の世界』，光言社
- 桜井義秀（2005）「統一教会」項目，井上順孝編集『現代宗教辞典』，弘文堂
- 加地伸行（1990）『儒教とは何か』中公新書
- 趙載国（1998）『韓国の民衆宗教とキリスト教』新教出版社
- 世界基督教統一神霊協会編（1978）『統一教会史（上）』，成和出版社
- 世界基督教統一神霊教会（1993）『原理講論』（普及版）光言社
- 世界基督教統一神霊教会編（1993）『文鮮明先生の祈祷』，成和出版社
- 世界基督教統一神霊教会編（2000）『神様の摂理から見た南北統一』，公言社
- 世界平和超宗教超国家連合他編（2005）『神様は真の父母・真の師・真の王』，出版社未定
- 公言社編（1997）『救援摂理史の原理観』，公言社
- 村上重良（2000）「統一協会，原理運動」項目，『世界宗教事典』，講談社
- 文鮮明（1985）『み旨と世界』，公言社
- 李御寧（1978）『韓国人の心 - 恨の文化論』，学生社

韓国語

- 黄善明（1992）『朝鮮朝宗教社会史』，一志社
- 黄ピルホ（1986）「統一教の神観」『宗教研究』，韓国宗教学会
- 成和出版社編（1999）『真の父母様の生涯路程1』，成和出版社
- 成和出版社編（2002）『イエス様の生涯と愛』，成和出版社
- 崔吉城（1987）「『巫俗』から見た西洋文明の衝撃と受容」『伝統文化と西洋文化Ⅱ』成均館大学出版部
- 廬吉明（1996）『韓国新宗教の研究』経世院.
- 廬吉明（1988）『韓国の新興宗教』カトリック新聞社
- 李チング（2000年3月）「韓国新宗教史の立場から見た統一教」『韓国基督教歴史研究所消息58号』，韓国基督教歴史研究所
- 柳炳徳（2000）『近・現代韓国宗教思想研究』マダン企画
- 趙興胤（1997）『巫－韓国巫の歴史と現状』民俗社
- 世界平和統一家庭連合編（2004）『真の信仰とみ旨の道』，成和出版社
- 文鮮明先生み言葉編集委員会，『文鮮明先生み言葉選集』，
<http://truelove.new21.net/Malsm/037/FWKIK.htm>から引用

“*Han*” and the Unification Church

Tomitate FURUTA

”*Han*” is a “feeling of sorrow” and a notion which Koreans perceive as a part of their ethnic identity, a unique emotion, and even a kind of beauty. Although ”*han*” has been studied for a long time in fields such as literature and psychology, it is also found in Korean Shamanism and folk religion that have been passed down since ancient times.

This paper discusses how “*han*” is interpreted in the teachings of the Unification Church, a new religion of Christian provenance established in 1960s. In this Church’s doctrine the concept of “*han*” has been incorporated in the image of both God and Jesus, and serves as the core of the teachings. This paper considers three kinds of “*han*”: the “*han*” of God, Jesus, and the chosen people.

In Unificationism, God is regarded as bearing ill feelings and having “*han*” since its original parent-child relationship with humans has been destroyed by the Satan. Jesus was born as a messiah who was to dispel God’s “*han*”, but he himself came to feel “*han*” as he was murdered before he was able to achieve his original purpose of starting a family. Furthermore, in Unificationism, Koreans are regarded as the chosen people who have lived in suffering throughout their history bearing “*han*,” and this suffering is considered as the very reason why they were chosen by God who himself bears “*han*”.